

家庭学習に関する調査研究Ⅱ

—大学生への調査を通して—

迫田 孝志 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター]・森藤 悦子 [鹿児島大学教育学部]

A research of home studying Ⅱ — Through some questions for university students —

SAKODA Takashi · MORIFUJI Etsuko

キーワード：主体的な学習態度、塾や習い事の学習、大学生の授業外の学習時間、
家庭学習についてのアドバイス

はじめに

迫田・森藤(2014)は、大学生を対象に家庭学習に関する調査を実施し、小学校・中学校・高校時代の家庭学習の状況について分析した。その結果、各学校段階で時間をかけて作成し、保護者へも配布・説明されることが多い「家庭学習の手引」があまり活用されていないことが明らかになった。

また、家庭学習の主な内容は、小学校で宿題と読書、中学校では宿題と読書に加えて塾や習い事の学習、高校では読書が減少し、宿題と自主的な予習・復習、興味・関心のある内容へと変化していることなども明らかになった。

さらに、児童生徒の主体的な学習態度を育み、学力向上を図るためには、保護者と連携しながら教師が家庭学習の方法について個別に丁寧に指導することの必要性にも言及している。

平成26年度全国学力・学習状況調査報告書(2014)でも、学校の授業時間以外での学習時間が長い、自分で計画を立てて勉強する、学校の宿題や予習・復習をする、読書が好きで読書時間が長い児童生徒の方が平均正答率が高い傾向が見られており、主体的な学習態度を育成し、学力向上を図るためには、授業だけではなく家庭学習のあり方も問う必要性が求められているといえる。

1 目的

本研究では、迫田・森藤(2014)で実施した調査の中で大学における授業外の学習時間とその内容や理由との関係を明らかにするとともに、小学生・中学生・高校生時代の塾や習い事の効果及び小学生・中学生・高校生への家庭学習に

についてのアドバイスの分析などを通して家庭学習のあり方を検討することを目的とする。

2 方法

(1) 調査対象者：K大学生180名(教職理解科目「学校教育相談」の受講者)を対象とした。

(2) 調査実施日：平成25年6月5日(水)

(3) 質問紙の内容

① 大学生としての1日の授業外学習時間と主な内容や理由

学習時間は分単位で回答し、主な内容や理由は自由記述で回答する。

② 塾や習い事などで役だったこと

小学生、中学生、高校生の頃などに体験したことで自分にとって役だったと思うことを自由記述で回答する。

③ 小学生、中学生、高校生への家庭学習についてのアドバイス

自分の経験を通して、小学生、中学生、高校生に対して家庭学習についてそれぞれどのようなアドバイスをするか自由記述で回答する。

(4) 分析

回答のあった180人全員のデータを活用したが、①については、中央値を境に学習時間多群、少群として他の項目との関連を検討した。②については、回答のあったもののみを分析した。③については、自由記述の内容を宿題、予習・復習、授業、読書、学習習慣など9つの観点で分類した。

3 結果

(1) 大学生の授業外の学習時間

授業外の学習時間の学年毎の平均と調査対象者全体の授業外の学習時間の分布をそれぞれ表1、図1に示す。

表1 学年別授業外の学習時間

	人数	平均学習時間(分)と標準偏差
大学1年生	11	96.82(60.51)
大学2年生	107	89.31(73.29)
大学3年生	54	93.15(62.34)
学年未記入	7	181.43(160.67)
全体	180	94.50(75.79)

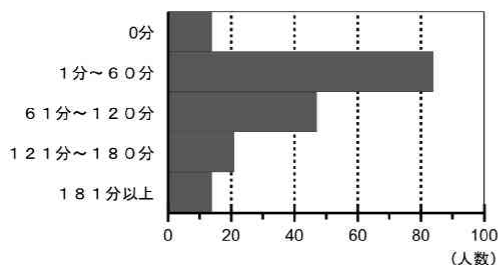


図1 授業外の学習時間

表1に示すように授業外の平均学習時間は94.50分、標準偏差(75.79)とばらつきが大きく、学習時間0分と回答した学生も14人いる。中央値は60分であり、60分以下(98人)を学習時間少群、61分以上(82人実質90分以上)を学習時間多群として今後の分析を行うこととした。

また、文系と理系学生の平均学習時間を表2に示す。分散に差が見られたため、ウェルチの法により文系と理系の学生の平均学習時間を比較したところ、5%水準で有意な差が見られた($t=2.34$, $df=99.08$, $p<.05$)。

表2 文系・理系別授業外の学習時間

	人数	平均学習時間(分)と標準偏差
文系	43	74.88(56.65)
理系	137	100.66(80.05)

学年及び文系、理系毎の分析では、グループ間で対象者数が大きく異なるため、本研究では参考として示すのみとし、他の調査項目との関連等については行わないこととした。

(2) 授業外の学習の理由等

授業外の学習の内容や理由についての自由記述を分析した結果、表3の6類型に分類することができた。また、複数回答も可としてすべての記述を活用した。

表3 授業外の学習の理由等

類型	授業外の学習の主な理由
①	レポートや課題を仕上げるため
②	テストに合格し、単位を取得するため
③	予習、復習など授業内容の理解のため
④	留学、TOIECや資格、就活(教採、公務員)対策などのため
⑤	興味のある学習、専門の勉強、卒論や研究の準備をするため
⑥	その他(講師、家庭教師のため、自分自身がだらけられないため、無答など)

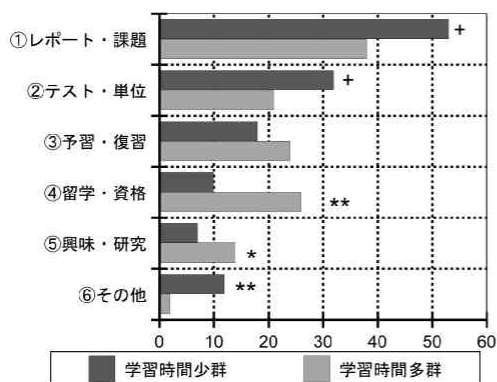
大学での授業外の学習時間の多少が、他の調査項目と関連しているかを検討するため、授業外の学習時間の中央値(60分)で分けた学習時間少群及び学習時間多群と表3に示した授業外で学習する理由の6類型で分類したものを表4、図2に示す。

表4 授業外の学習時間の多少と学習の理由等

	学習時間少群	学習時間多群	合計
①レポート・課題	53	38	91
②テスト・単位	32	21	53
③予習・復習	18	24	42
④留学・資格	10	26	36
⑤興味・研究	7	14	21
⑥その他	12	2	14
合計	132	125	257

授業外の学習時間の多少と学習の理由の関係については、1%水準で有意な差が見られた($\chi^2=22.026$, $df=5$, $p<.01$)。

残差分析の結果、①レポート・課題、②テスト・単位取得に有意な傾向がみられ、④留学・資格、⑤興味・研究、⑥その他で有意な差が見られ、③予習・復習では有意な差は見られなかった。



(残差分析 + $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$)

図2 授業外の学習時間の多少と学習の理由等

(3) 塾や習い事で役だったこと

小学生・中学生・高校生の頃、学校の学習以外で家庭学習と並んでウェイトの大きい塾や習い事の学習を通して、自分自身に役だったことを記述した内容を分類したものを表5に示す。

表5 塾や習い事で役だったことの類型

類型	主な内容例
実用的内容	そろばんで計算力がついた。 英語塾で英語力がついた。 ピアノで音楽に自信がでた。
精神的 content	空手で集中力が高まった。 ピアノで度胸がついた。 ストレス発散ができた。
勉強法的内容	効率的な勉強ができた。 不得意教科の勉強ができた。 学習スタイルを確立できた。

また、回答のあった142人の内容を表5の3類型で整理したものが表6であり、回答内容の割合には1%水準で有意な差が見られた($\chi^2=78.48, df=2, p<.01$)。

表6 塾や習い事で役だったこと

実用的内容	精神的 content	勉強法的内容
96	32	14

さらに、大学での授業外の学習時間の多少と塾や習い事で役だったことの割合を示したのが表7であるが、有意な差は見られなかった($\chi^2=0.176, df=2, n.s.$)。

表7 学習時間の多少と塾や習い事で役だったこととの関連

	実用的内容	精神的 content	勉強法的内容
学習時間少群	55	17	8
学習時間多群	41	15	6

(4) 小学生、中学生、高校生への家庭学習についてのアドバイス

大学生自身のこれまでの経験から小学生、中学生、高校生に家庭学習についてアドバイスするとすればどのようなアドバイスをするか自由記述で回答のあった全てのデータを活用し、複数回答も可として分析した結果、表8に示すような9つの類型に分類することができた。

表8 家庭学習に関するアドバイスの類型

類型	主な内容例
①宿題	宿題をきちんとする。
②予習・復習	予習・復習をしっかりとる。
③授業	授業に集中して取り組む。
④興味・関心	興味のある分野を勉強する。
⑤部活・体験活動	部活との両立、外で遊ぶ。
⑥学習習慣	学習する習慣をつける。
⑦読書	たくさん本を読む。
⑧先生の活用	先生に質問する。
⑨塾・進路他	塾で勉強、進路を決める。

この9つの類型で家庭学習のアドバイスを分類したものと大学の授業外の学習時間の多少との関係を小学生、中学生、高校生毎に分析した。

まず、大学の授業外の学習時間の多少と小学生への家庭学習のアドバイスの関係について図3に示す。 χ^2 検定の結果、有意な差は見られなかった($\chi^2=6.51, df=8, n.s.$)。

同様に中学生への家庭学習のアドバイスについて図4に示す。 χ^2 検定の結果、有意な差は見られなかった($\chi^2=8.17, df=8, n.s.$)。

さらに高校生への家庭学習のアドバイスについて図5に示す。 χ^2 検定の結果、有意な差は見られなかった($\chi^2=4.67, df=8, n.s.$)。

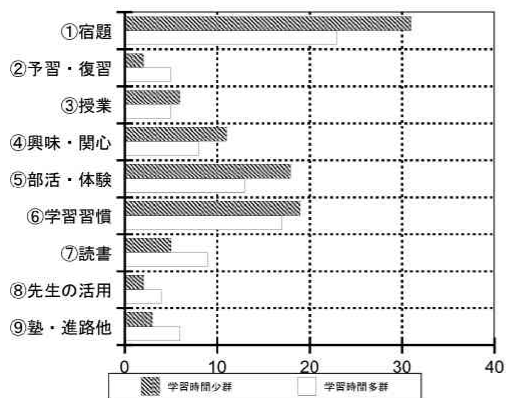


図3 授業外の学習時間と小学生への家庭学習のアドバイス

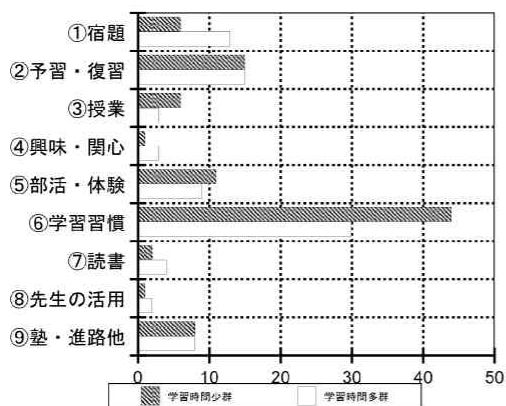


図4 授業外の学習時間と中学生への家庭学習のアドバイス

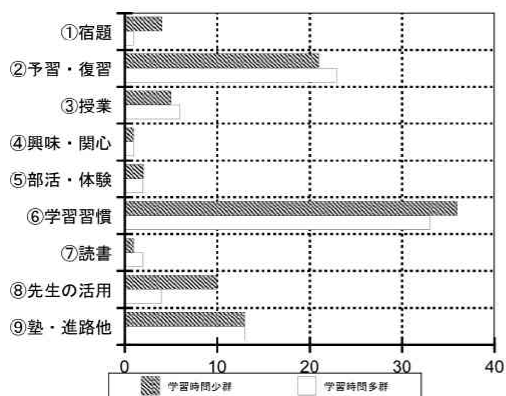
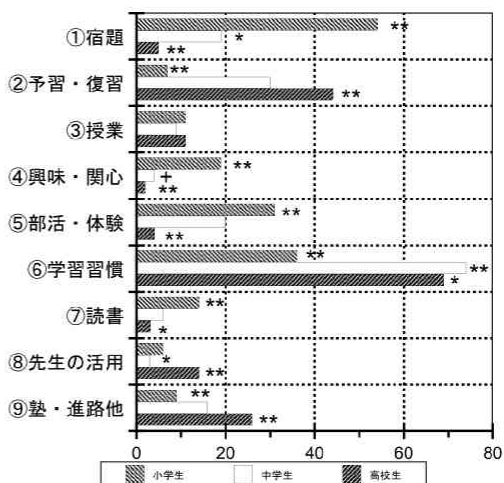


図5 授業外の学習時間と高校生への家庭学習のアドバイス

次に、小学生、中学生、高校生などアドバイスの対象者と家庭学習のアドバイスの内容について表9と図6に示す。 χ^2 検定の結果、1%水準で有意な差が見られた ($\chi^2=154.52$, $df=16$, $p<.01$)

表9 小・中・高校生への家庭学習のアドバイス

	小学生へ	中学生へ	高校生へ	合計
①宿題	54	19	5	78
②予習・復習	7	30	44	81
③授業	11	9	11	31
④興味・関心	19	4	2	25
⑤部活・体験活動	31	20	4	55
⑥学習習慣	36	74	69	179
⑦読書	14	6	3	23
⑧先生の活用	6	3	14	23
⑨塾・進路他	9	16	26	51
合計	187	181	178	546



(残差分析 + $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$)

図6 小・中・高校生への家庭学習のアドバイス

残差分析の結果、①宿題では、小学生、中学生、高校生の全てで有意な差が見られた。②予習・復習では、小学生と高校生で有意な差が見られた。③授業では、有意な差は見られなかった。④興味・関心では、小学生と高校生で有意な差が見られ、中学生で有意な傾向が見られた。⑤部活・体験活動では、小学生と高校生で有意な差が見られた。⑥学習習慣では、小学生、中学生、高校生の全てで有

意な差が見られた。⑦読書では、小学生と高校生で有意な差が見られた。⑧先生の活用では、中学生と高校で有意な差が見られた。⑨塾・進路他では、小学生と高校生で有意な差が見られた。

4 考察

(1) 大学生の授業外の学習時間

本研究における授業外の平均学習時間は、表1のとおり94.50分である。「鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012年度調査報告」(2013)によると、共通教育科目等の予習・復習の時間が少ない学生が多いことが指摘されている。本調査の対象も1年生・2年生が半数以上を占めており、同様の結果を示していると言える。

迫田・森藤(2014)の小学3、4年生の平均家庭学習時間は41.84分、塾や習い事の平均学習時間が56.68分で学校外の学習時間は合計で98.52分となり、大学生の授業外の平均学習時間と同じ程度である。大学入学直前の高校3年生の平均家庭学習時間は200.45分、塾や習い事の平均学習時間が60.50分で合計260.95分は、大学生の授業外の学習時間の約2.8倍であることを考えると大学生の授業外の学習時間に物足りなさを感じる。

(2) 授業外の学習理由

表4、図2の授業外の学習時間の多少と学習理由には有意な差が見られており、学習理由の6類型の中の①レポート・課題、②テスト・単位、⑥その他では、学習時間少群の割合が高く、④留学・資格、⑤興味・研究では、学習時間多群の割合が高くなっている。このことから、与えられた課題やテストのための学習だけではなく、興味・関心のある分野の理解を深める学習、留学や資格取得、就職のための学習など将来的な目標を設定して努力している学生は授業外の学習時間が長くなっていると考えられる。

市川(1995)は、従来の内発的・外発的動機づけの枠組みによらない学習動機の2要因

モデルを提唱した。その2要因とは、学習内容の重要性と賞罰の直接性(学習の功利性)であり、その中に充実志向、訓練志向、実用志向、関係志向、自尊志向、報酬志向の6つの学習動機を構造化している。

平山ら(2001)は、この2要因モデルを用いて大学生の学習動機を分析し、学習内容の重要性の要因の有効性を明らかにしている。

本研究で類型化した学習理由は、市川(前述)や平山ら(前述)の学習の功利性の要因も学習内容の重要性の要因もともに重視する実用志向にほとんどが該当すると考えられる。

以上のことから、大学生の学習を充実させるためには、予習・復習を必要とする授業内容の構成に加え、実用志向に対応する大学生のキャリア形成に資する取組を入学当初から計画的に行う必要があることが示唆される。

(3) 塾や習い事で役だったこと

小学生、中学生、高校生の頃の塾や習い事で役だったことの記述を表5に示すように、①そろばんで計算力がついたなどの実用的内容、②集中力がついた、ストレス発散ができたなどの精神的 content、③効率的な勉強ができたなどの勉強法的内容に分類した。

小学生、中学生、高校生の時期毎に記述するよう求めなかったため、記述された内容がどの時期であるか特定することはできないが、表6から塾や習い事で直接指導を受けている内容の理解とそれに関連する教科学習への自信の高まりなど実用的内容の割合が、67.6%と極めて高いことが分かる。

表7から大学の授業外の学習時間の多少と塾や習い事で役だったこととの関係については、有意な差が見られておらず、大学での授業外の学習時間の多群少群ともに、実用的内容の割合が高くなっていることが分かる。このことは、前述の学習理由において実用志向の内容が多かったこととも深く関連しているものと思われる。

(4) 小学生、中学生、高校生への家庭学習につ

いてのアドバイス

大学の授業外の学習時間の多少と家庭学習のアドバイスとの関係を小学生、中学生、高校生ごとにそれぞれ検討したが、有意な差は見られなかった。しかし、小学生、中学生、高校生それぞれへのアドバイス上位3つを挙げると次のようになる。

図3から小学生へのアドバイスでは、①宿題をしっかりとすること、⑤野外での体験や遊びも大事であること、⑥学習習慣を身に付けることなどが上位の内容である。

図4から中学生へのアドバイスでは、⑥学習習慣を身に付けること、②予習・復習をしっかりとすること、⑤部活との両立、野外での体験活動などに参加することなどが上位の内容である。

図5から高校生へのアドバイスでは、⑥学習習慣を身に付けること、②予習・復習をしっかりとすること、⑨塾での勉強や早めに進路を決めて学習することなどが上位の内容である。

以上のように大学での授業外の学習時間の多少との関係は見られなかったが、表9、図6に示したように小学生、中学生、高校生の対象者と家庭学習のアドバイス内容については、有意差が見られた。

小学生、中学生、高校生といった学校の各段階に応じて次のような家庭学習のアドバイスの特徴が見られる。

小学生へのアドバイスとしては、①宿題をしっかりとすること、④興味・関心のある分野の勉強をすること、⑤野外での体験や遊びなども大事であること、⑥学習習慣を身に付けること、⑦読書をするなどが特徴的な内容である。

中学生へのアドバイスとしては、⑥学習習慣を身に付けることが特徴的な内容である。

高校生へのアドバイスとしては、②予習・復習をしっかりとすること、⑥学習習慣を身に付けること、⑧先生に積極的に質問すること、⑨塾での勉強や進路を早く決めて学習することなどが特徴的な内容である。

すべての段階で学習習慣を身に付けることは、

大事だと考えられており、主体的な学習態度を育み、学力を向上させるためにも、個に応じた学習習慣の形成を図る取組の必要性が示唆されていると言えよう。

また、③授業に集中して取り組むことに関するアドバイスは、小学生、中学生、高校生のいずれにおいても高くはない。調査項目が家庭学習についてのアドバイスを問う内容であったため、授業の取り組みに関するアドバイスが少なくなったものと思われる。

これらのアドバイス内容等は、大学生自身の経験に基づいて書かれており、大学生の家庭学習に関する基本的な考え方が確認できるものであり、児童生徒の家庭学習のあり方を検討するだけでなく、大学生自身の学習を充実させるためにも活用していく必要があると考える。

おわりに

本研究では、大学での授業外学習時間、塾及び習い事等で役だったこと、小学生、中学生、高校生への家庭学習のアドバイスなどを分析することで、児童生徒の家庭学習のあり方だけでなく、大学生の家庭学習に関する意識を把握することができた。今後の教育・研究活動に生かしたいと考える。

引用・参考文献

- 市川伸一 1995
「教育と学習の心理学」岩波書店
- 平山祐一郎・平山祥子 2001
「大学生における学習動機の2要因モデルの検討」
東京家政大学研究紀要第41集(1) P101-105
- 鹿兒島大学FD委員会 2013
「鹿兒島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012年度調査報告」
- 文部科学省・国立教育政策研究所 2014
「平成26年度全国学力・学習状況調査報告書」
- 迫田孝志・森藤悦子 2014
「家庭学習に関する調査研究—大学生への調査を通して—」鹿兒島大学教育学部教育実践研究紀要第23巻 P173-180